

# 游美

- 1 小石川 力雄さんの作品と作品についての言葉
- 2 作家探訪 植野 睦夫先生
- 3 美に遊ぶ
- 4 心に残る私の一点  
会員の皆様へ  
「游美100号」原稿をお寄せ  
ください  
あとがき



小石川 力雄「翔」

2020年11月20日撮影／写真／500×600mm／2021年度茨城県芸術祭美術展覧会6分科 入選

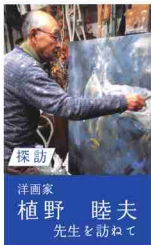
自分は毎朝のように、健康保全のためと写真撮影がしたいので偕楽園公園周辺を散策しています。ジョギングやウォーキングをしている人達が沢山いて、そのうちに、犬にひかれて歩く人・太極拳をする人々などで賑やかになります。

遅くとも太陽が昇る30分前には現地に着かないと、空が綺麗に焼けるのに間に合わなくなってしまいます。まだ暗いのでカメラに三脚をつけて担いで歩いています。毎朝のように行っても1日として同じ景色は無いので、飽きることはありません。

公園の春は梅に始まり桜が綺麗に咲き誇り、花畑にはポピー・矢車草・ネモフィラ・百日草・向日葵やコスモスなどが次々に咲き競い見事でしたが、ここ数年は花畑がなくなり殺風景で寂しいばかりです。

偕楽橋を千波湖へ向かって行くと湖畔の柳の木に白鷺がとまって居ました。撮っていると、空が赤く焼けているうちに風に向かって飛び立ってくれたので、良い具合に動きがあるこの写真が撮れました。

(水戸市在住)



探訪

洋画家  
**植野 睦夫**  
先生を訪ねて

## 植野 睦夫ワールドによるこそ

木々が彩りはじめた秋晴れの午後、洋画家の植野睦夫先生を訪問した。県庁近くの住宅街に先生のアトリエがある。ナビと格闘の果て遅刻して辿り着いたわれらシルバー広報委員を、先生はにこやかに迎えてくださった。すみませーん。マスクの中に笑顔が。ほっ。

「まあまあ、アトリエにご案内する前にこちらへどうぞ」と、和室に通された。ん、お茶室？ではないが、思わず歓声をあげそうになる美しい空間であった。古美術店の奥座敷とでも言おうか、時代物の長火鉢や飾り棚に骨董が並ぶ。「おやじが集めていた物を譲り受けたり、骨董市で出会ったり、古いものが好きなんです。こういうものに囲まれて育ったし」と。さらに縁側から外に視線を向けると、盆景のように丁寧に造りこまれた見事な庭、遊び心満載の小宇宙が広がる。昔から盆栽や山野草にも興味を持たれていた先生が自ら作庭されたそうだ。むむっ、まさに植野睦夫ワールド。

長火鉢を囲んでお話を伺う。先生は1940年生まれ、水戸市五軒町のご出身。銀行員を定年まで勤め上げられながら、常に筆を持ち研鑽を積んでこられた。若い頃から所属していた新槐樹社から日洋会に移り画風も次第に変わっていった。同年59歳で日展に初出展、初入選した。それからは快進撃が続く。以来今年まで

22回ほど連続して入選を果たされている。現在は日展会友であり日洋会、県展などの審査員もつとめる重鎮である。後進の指導も様々な機会とされている。

銀行の仕事と制作の両立はどのように？「当時は大変だったんでしょうね。でもとにかく絵を描くことが好きでしたから苦には感じなかったな。東京の国際部に単身赴任したときは、独自寮に石膏像を持ち込んで、デッサン修行に励んだものです」。先生の静物画には独特のモチーフが描かれていますね。「古い物、今にもだめになりそうなもの、朽ちていくものに愛おしさシンパシーを覚えます。モチーフは自分が大切にしたい、なにかを感じ、好きなものでないとなかなかいい絵は描けません。そういったものを集めるのも仕事ですかね」。

次にアトリエを見せて頂く。ワオ！壁一面の棚に先生の「好きなもの」牛骨、貝殻、錆びた鎖や漁具、古い雑貨、人形等々が混沌としながら整然と並んでいる。先生は野外のスケッチやこれらのモチーフを自在に構成して、パッチャルな画面を創造していく。緻密な観察と正確な描写が、それらをリアルに表現している。古いものを媒体としながら、画面には現在という時間も新鮮な風や空気までもが描かれている。この、先生の物語を紡ぎ出す「言葉」がこれらのモチーフなのではないか。和室や庭における先生の表現と静物画の表現が繋がり重なり、先生の世界観はより深いものに感じられた。

シャンと背筋を伸ばしユーモアたっぷりにお話しくださった先生。まだまだ大作に挑まれる精神力や体力は、週に4日は楽しまれるという卓球で鍛えられているにちがいない。



「記憶の種」  
2005年／油彩・カンヴァス／S100  
第19回日洋展(2005年)



「記憶の種」  
2008年／油彩・カンヴァス／F130  
第22回日洋展(2008年)



「記憶の種」  
2020年／油彩・カンヴァス／F100  
第7回日展(2020年)

植野 睦夫(うへの かつお) *mutsuo.*

1940 水戸市に生まれる  
1960 茨城県芸術祭美術展覧会 特賞・友友賞受賞  
茨城県彫刻芸術展覧会 奨励大賞受賞  
水戸市芸術祭美術展覧会 市長賞受賞  
1981 新槐樹社展(元準会員)新槐樹社賞受賞  
1999 日洋展 日洋賞受賞

2001 現代美術センター(レクテラ)賞受賞  
上野の森美術館大賞展 入選  
日洋展 会員賞受賞  
2003 中村 経 芸術賞受賞  
2005 藤原ジャパン美術財団選抜奨励展出品  
2007 日洋展 委員賞受賞  
2018 50目水戸市芸術祭美術展「水戸の風」出品

日展 入選22回、個展 6回、画廊企画展 6回。  
現代茨城作家美術展出品  
現在 日展会友、日洋会評議員・審査員、茨城県芸術祭美術展覧会常任委員・審査員、水戸市芸術祭美術展覧会常任委員・審査員、水戸市文化振興協議会委員、茨城県ふれあい美術展・わくわく美術展審査員等  
住所 水戸市平塚町1827-39

# 美に遊ぶ

## コロナ禍の美術鑑賞

中野 あや子



東京国立近代美術館で、日本初個展となる「ピーター・ドイグ展」が2020年2月26日～6月14日の日程で開催予定。しかしご存じの様にコロナ禍で中止を余儀なくされ、同年6月12日から日時指定制で再開、本人の快諾により10月11日迄延長され、初期作から約70点が展示された。

ロマンティックかつミステリアスな風景を描く画家として知られ、多様なイメージから成る作品は、いつか何処かで見た事がある様に感じられる…。同世代、後続世代のアーティストに多大な影響を与えている事から過去の巨匠になぞらえて、しばしば「画家の中の画家」と称される。その作品は30億の値が付く程…とのママ知

識の元、やっと再開された9月に行きました。入ったとたん「アツ好きな絵」。その絵が良いかどうかは、私にとっては好きか嫌いかなんです。あらかじめ調べて「いいな」と思っただけでしたが、大きな絵の前に立つと吸い込まれる様な感覚…さすが30億。いや、純粋にいくら見ても見飽きない色彩も、不思議な感覚も。絵画界では、新しい才能はもう出ないのでは、と言われた中で出現したピーター・ドイグとの見解もあるとのこと。これは、タイムリーな出会いと言うのでしょうか。

また、私は旅行した折、その地の美術館を巡り、知らなかった画家に会うのが楽しみの一つです。先日あずみ野へ旅した際も、小高い丘の上にある「北アルプス展望美術館」に行きました。ちょうど「無拘の美術家宮澤好男 園委展」<sup>ほな</sup>という展覧会の初日でした。コロナ



ピーター・ドイグ「ラベイロウ・スウォール2004」/2004年/油彩・カンヴァス/200×250.5cm/ニューヨーク近代美術館蔵/Gift of Anna Marle and Robert F. Shapiro in honor of Kynaston McShine / © 2021. Digital image, The Museum of Modern Art, New York/Scala, Florence

禍で、おまけに雨で、鑑賞者は私と夫だけ…もったいない様な空間で、拝見しました。

宮澤好男は絵画・オブジェ・陶芸と多才で、どれも完成度が高く、素晴らしい。でも、かつて先輩画家に、「二兎を追うものは…」の言葉もある様に、どれか一つに精進すべきだ、と勸言されたが、彼はどれも好きで選ぶ気などない。それは純粋な欲求だと思うのです。まるでエンジェルスの大谷翔平選手の様。

ピーター・ドイグも、キャンバスに水彩だったり、と自在です。私もヘタな絵を描きますが、既成概念にとらわれず自由になれたら、と思っています。

(牛久市在住)



ピーター・ドイグ「Gasthof zur Muldentalsperre」/2000～2002年/油彩・カンヴァス/196×296cm/シカゴ美術館蔵 The Art Institute of Chicago/Art Resource, NY / Gift of Nancy Lauter McDougall and Alfred L. McDougall



ピーター・ドイグ「カヌー・湖」/1997-1998年/油彩・カンヴァス/200×300cm / Yageo Foundation Collection, Taiwan 蔵

ここ5年ほど正月に、東京の「三井記念美術館」で雪松図屏風（円山応挙・国宝）に会うのを楽しみにしている。この絵は紙本墨画淡彩・六曲一双の屏風で、1765年頃の作、豪商三井家の所蔵である。

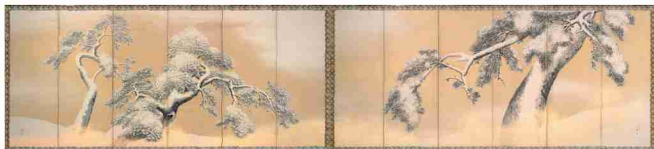
以前から知ってはいたが、実際に足を運び出会った時の感動は忘れられない。この絵の雪の積もった右隻の雄松、左隻の雌松の神々しさと迫力に、体が震える感動を覚えた。

何より、雪を描かずして雪を表現する「外ぐま」の画法の完成度に驚いた。同時代の作品の多くは、狩野派や琳派に見られるように胡粉で白を描いている。応挙は「外ぐま」の手法でモチーフの外側をほかしながら塗り、塗り残しの下地（この絵では紙）の白を生かして、雪を表現仕切っている。それでい

て胡粉で描いたものよりも、松の枝に雪がふわりと降り積もり、キラキラ光る風景もごく自然さを醸し出している。

想像してみよう。美術史上その100年後に現れる、印象派の重鎮たちがこの絵をみたらなんとというだろう。当時の浮世絵がジャポニズムのトリガードとすれば、描かずに描ききる「外ぐま」の手法は西洋絵画では想像すらできないだろう。シスレー、モネ、ピサロそれぞれが、雪の風景を描いてはいるが、一様に白の絵の具で雪景色を描いているはずだ。下地を生かすという発想すら皆無だったろう。

古来、梨を「有りの実」ともいう。言葉遊びではあるが、ないもので「有る」ように見立てるのは、日本人の得意技かもしれない。（日立市在住）



円山応挙「雪松図屏風」／18世紀頃／紙本墨画淡彩・六曲一双／各葉155.5×362.0cm／三井記念美術館蔵

訂正 游美98号4頁「心に残る私の一点」で、間違いがありました。お詫びをし、訂正いたします。  
・左段15行目「風」、正しくは「鵬」です。

## 会員の皆様へ 「游美100号」原稿をお寄せください

「游美」は2022年度第1回の発行が100号になります（6月下旬発行予定）。記念すべき100号に、ぜひ会員皆様からのお声をお寄せいただきたくお願ひ申し上げます。

- ・原稿内容 友の会活動や「游美」等についての思い出や感想など
  - ・字数 400字程度
  - ・締め切り 2022年4月30日(土)
  - ・原稿形式 特に問いません
  - ・送付方法 E-mail、又は郵送
- 送付先は、本誌P4右下表示の「友の会」宛

## あとがき

- 国内ではコロナ禍も一段落といった感があるものの、オミクロン株等新型が次々と現れ、まだまだ気を抜けない日々です。現状を見極め、今できることをふれずに続けていくことの大切さを痛感しています。4頁にはなりましたが、今年度も予定通り「游美」を発行することができました。これも会員皆様のご協力のお陰と感謝しております。
- 来年は、100号発行を皮切りにスタートすることになります。少しでも明るい、充実した内容になることを願っています。
- ニューヨーク近代美術館蔵、ピーター・ドイグ「ラベイロウズ・ウォール2004」の画像データおよび掲載

許可を、Scala Archives (Firenze) の Sales Manager for Japan, Elvira Allocati氏より賜りました。深く感謝いたします。なお、掲載料は€121でした。

○シカゴ美術館蔵、ピーター・ドイグ「Gasthof zur Muldentalsperre」の画像データおよび掲載許可を、Art Resource (New York) の Permissions Director, Jennifer Belt氏より賜りました。深く感謝いたします。なお、掲載料は\$130でした。

○Yageo Foundation Collection, Taiwan 蔵、ピーター・ドイグ「カヌー・湖」の画像データおよび掲載許可を、YAGEO Corporation of the Chairman Office, Angela Hsiao 蕭雅文氏より賜りました。深く感

謝いたします。掲載料は無料でした。

○三井記念美術館蔵、円山応挙「雪松図屏風」の画像データおよび掲載許可を、同館長 清水 眞澄氏及び運営部 小笠原 史氏より賜りました。深く感謝いたします。掲載料は公的利用とみなされ無料でした。

茨城県近代美術館 友の会会報  
游美 No.99

発行 2022(令和4)年2月  
編集・発行 茨城県近代美術館友の会  
〒310-0851  
水戸市千波町東久保666-1  
TEL.029-243-5111  
E-mail: fmomaibk@gmail.com  
HP : https://www.fmoma.com/

印刷 株式会社 光和印刷